

築地の鮎

森岡 正作

祭馬

蟾 蜷 口 に 門 あ る ご と し
白 藤 の 大 波 な ら ば 溺 れ た し
楽 隊 に 浮 足 立 て る 羽 抜 鶏
ま く な ぎ に 好 か れ て る た る 優 男
郷 匂 ふ 築 地 の 鮎 の 小 振 り に も
飾 り 塩 鮎 の 矜 持 を 満 た し け り
夢 の 端 に 触 れ て 祭 の 笛 太 鼓

男気が感じられる登四郎先生なのでさぞかし祭の句などは多からうと思っていたが、意外にも少なく、祭に対するご自分の熱気というよりは、(祭馬はやり舎人の手に負へず)の御句のように冷静に周囲の盛り上がり詠まれている。

祭のシーズンであるが、私の住んでいる茅ヶ崎市には七月の海の日に挙行される「浜降祭」がある。寒川町を含めた市内の各神社の神輿が夜中に神社を出て、それぞれの地区の自治会館で氏子等と合流し、四時ごろトラックで茅ヶ崎海岸へ向かうのである。そして砂浜に集結した三十九基が、開式の儀式の後一基ずつ順番に波打ち際まで進み、海に入って禊ぎを行うが、胸ぐらひまで浸かった担ぎ手の熱気で勇壯の観を呈するのである。浜での一通りの儀式が終わると神輿はまた自治会館に戻り、笛太鼓を従えて地区内を巡行する。いよいよ今夜あたりから笛太鼓の練習の音が聞こえてきそうである。